



Title	日米農業経営研究会の思い出
Author(s)	天間, 征
Citation	季刊農業経営研究, 5, 51-53
Issue Date	1959-01-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/36279
Type	departmental bulletin paper
File Information	5_51-53.pdf



る一つの労働手段のみの共同利用ということの基本的な限界に逢着するわけである。

要するに、農業機械は労働手段あるいは生産手段の体系の構成要素として、土地や他の労働手段や労働対象と共に一つのセットを形成しているわけであるが、その単なる一部分にすぎぬ機械のみを共同によつて高度化させようとすることは、セットそのものの高度化の方向と必ずしも一致しない。従つて機械化を共同導入、共同利用の形で進めようとする場合には、それを単なる機械利用の側面、換言すれば全作業体系の中の一局面のみに限定して共同化を考えるのでは意味がないのであつて、この方向を生産手段の全体系に拡大、推進して行くことを考えねばならないであろう。

註(1) 農業機械そのものが、原動機、伝導機、作業機の三つの部分のセットであるという意味ばかりでなく、土地や労働対象との間の関係についても一つのセットを形成していると考える。(3町の土地、役馬1頭、ブラウ1台とか、15町の土地、トラクター1台というように生産手段の技術的な結合関係に関してセットが考えられるのである。)詳しくは拙稿「農業経営の動態的把握に関する序論的考察」農業経営研究3号を参照のこと。

(2) 綿谷、西村編「農業理論の現状と展望」P.119以下を参照。(特にP.129)

(3) 33年7月実態調査を行つたが、問題が時系列的な考察を必要とするため、23年に北

海道立農業試験場の山本氏らが行なつた調査資料、及び同氏による25年、32年の調査資料、並びに32年に国立農業試験場の新藤氏の行つた調査資料、を参照させていただいた。ここで主として引用したのは北海道立農業試験場報告第1号「女満別実験部落における農業共同作業」である。

(4) 実態調査の際に、「共同にすれば機械がいたむ」という言葉をしばしば聞いた。これは共同所有物に対して、粗雑な管理をするということ、いわば共同意識の欠除ということともかなり密接に関係してはいるであろうが、より客観的には利用の強度(すなわち連続負荷運転の長短による磨耗の差)が関係していると考えられる。そこでこれを耐用年数の上に反映させようとしたのである。

最後にこの考察にあつて、道立農業試験場の山本氏ならびに国立農業試験場の新藤氏の貴重な調査資料を参考させていただいたことに厚く感謝すると共に、一諸に実態調査に参加してくれた北大農経三年目幸氏ならびに女満別農協及び大東第二部落の方々に深謝する次第である。

尚、この考察では充分にふれることができなかったが土地所有と共同機械化との関連等、今後についてのこされている問題は多々ある。これらについても検討を進めつつあるが、厳しい御批判、御教示を与えられることを心から熱望している。(1958.8.31)

日米農業経営研究會の想い出

農業技術研究所

天 間 征

今回北大で開かれた日米農業経営研究會は、6週間という比較的長期のものであつたせい

か、その印象を端的に表現することは、私にとつて極めて困難なことに思われる。

われわれはゲームの理論、ダグラス函数、限界分析、線型計画、サンプリング法等の、いわゆる New approach を学ぶ一

方、Budgeting method, Firm accounting method, Suwey method その他の伝統的方法をも修得したのである。

今当時の参加者26人の頻振れを思い起すにつけても、その中には、New approach だけを

つと学びたかつたと思つている人達もかなりいた事だろうし、又その反対に真にアメリカ的な伝統的経営理論だけをもつと詳しくやつて欲しかつたと考えている人達もいたことであろう。そこにこの種研究会の運営の難かしさがあるようである。

学的造けいの深さと、その人柄によつて参加者全員を魅了した Dr. Swanson は、離日を前に私共の役所を訪れてくれた。そのとき彼と二人で、この研究会の成果について論じ合つた。その結論として、この会が必ずしも全面的に成功とは云えないということになつてしまつた事を告白せねばならない。

その最大の原因がわれわれ参加者の側にあつた事は残念なことである。それは参加者の研究方向に大きな差異があつたことに基づいていると思う。近代経済理論に強い興味を惹かれている人達と、伝統的方法にのみ慣れている人達に対して、共に関心を持たせ続ける講義というもの、日本人同志の場合でも難しいのであるから、言葉を異にする人達の間では一層至難なことに違いない。近代経済学専攻の Dr. Swanson の苦悩もそこにあつたことであろう。

しかしながら、今となつて思うことは、この種研究会は、何もその場で全部理解し得なくてもよいのではないかということである。私自身の経験からすると、2年前に F A O 主催の Farm management Development Center に出たとき Farm Budgeting method について全然未知で、大半の講義がこの

言葉の理解不足から follow 出来なかつた。私は大いに反省し、その後になつて大凡その手続きをマスターし、それがまた今回の研究会で役立つた。このように考えると、今回の成果の評価も軽々しく判断出来ない。元来教育というものが短期の効果をねらうものではなからう。参加者の多くが、恐らく研究会で大いなる刺激を受け、夫々の問題を抱いて帰つた事であろう。そして再びそれらの問題と取組むとき、当時の講義の節々がよみがえり、大いに役立つことであろう。

私は今、研究会で貰つたプリントを一枚一枚、当時の講義を思い出しながら整理している。これまで私にとって無縁のものであつた「ゲームの理論」も、Dr. Swanson の「Selection of crop varieties: An illustration of Game theoretic techniques」を開いてから急に身近なものに感ぜられるし、Dr. Engene の講義によつて、リニアモデルの設定にも、そんなに面倒くささを覚えなくなつた。このことだけでも私にとって大きな成果である。

会期中を通じて私にとって最も興味深かつたことはと云えば、それは古い理論と新しい理論との関係である。私のノートによると、Dr Engene は「Budgeting in U.S.A」というタイトルで次のように講義している。「もし生産函数によつて経営の内部関係がすべて表現されるならば、Budgeting などはいらないのだが、要素間の関係を明確にすることには生産函数は大き

な意義があるが、それらをつなぐものとして Budgeting の側からの接近が重要である。」又 Dr. Swanson の「Some research methods used in farm management」には、「リニアプログラミングは Budgeting の数学的形式である。農家の水準によく適合した適用をしなければ、計算の結果導き出された答は、紙に書かれた餅であつて、体系化されていない農家のカンによるモデルより一層貧弱なものとなる。そこでリニアの結果の適用に当つて Partial Budgeting が必要な附随的手段となると記されている。つまり理論モデル設定上の限界と数学的方法の限界とから、現状においてはかかるトライアルアンドエラーソッド「試行錯誤的方法」が数値の現実への適用に当つて隋伴せねばならないのであろう。1950年産の新しい酒を盛るに、1920年作の、古い器がふさわしいものとして再び大象に再認識されて來たのである。Budgeting に代表される古い理論が new approach の発展につれて補充的役割を果しつつあるのである。プラグアチズムに徹するアメリカの教授達が、研究会において敢て古い器に大なる関心を払つた所以もそこにある。それであるからこそ、アメリカに於ては、new approach の展開が実学としての農業経営学の存在を傷つけることなしに両立するのであろう。Dr. Heac や Dr. Engene はいづれも、抽象的理論のみを追求するわが国の経営研究者の傾向に対し、繰返し戒めの言葉を与えた。それはわれわれ参加者一同に対する多少の誤解の嫌

がないでもないが、今日のわが国の農業経営学が実学の立場を離れ、理論的体系化のみを追う傾向にあることから考え合せ、深く反省させられるのである。

「個々の研究課題は、現実から問題をみつけ、現実の要請に答えなければならぬ」とする Dr. Engene の名調子「How to up the research projects」, 未だわれわれ参加者に深い感銘を持ちつづけている。サヨナラパーティの席上、Dr. Engene の云った „Men be ractical” という言葉こそ、アメリカの教授達の誰もがその講義の底流に抱いていた信念であり、われわれ参加者の誰れの中にも芽を出し根を張って欲しい一粒の種子であつたろうと推測するのである。(1958. 9. 23)

新 藤 政 治

1ヶ月来にわたる「研究所」に参加して職場に戻ったとき、有意義な充実した期間だった、との気持ちでいっぱいだった。ともかく、大学を出てから、いや大学に入つて以来、この期間位に知識をつめこんだ時はなかつたかもしれない。そうした充足感が非常に強かつた。改めて来日された先生はじめ運営に当てられた方々の労に対し深く感謝する次第である。

本当に多くの事を学んだ。しかもプログラムは断片的でな

く、調査→問題の設定→分析方法の撰択→適用というような順序の中に新しい分析方法の適用の演習や、その背景などが織りこまれていた。そして又、別に毎日一時間半位づつ「ミショート・レクチャー」と題してあるトピックを選んで講義がなされた。今になつて折に触れ反芻してみると改めて内容の深さが思ひかえされるのである。

ところが一方で、何だかまともがなかつたという感じがなくもない。ある事柄はむしろよくわからなかつたし、ある項目はすでによく知つてのことであつた。大体われわれの知識欲は多少性急であつたかもしれない。語学の障害を乗り越えて、生い立ちも背景も違う外国の学問、それも応用分野の学問を学ぶときは多かれ少なかれ焦りに以た感情はつきものである。しかしこうしたことを認めたとしても「研究所」の成果を多少とも減らした原因として参加者の方にも問題があつたのではないだろうか。

一言にしていえば参加者各自がもつている知識や希望が離れすぎていた。もちろん相違があるのは当然である。ただその差が建設的に働いたとはいえないようである。互に牽制しあい、異質さえ意識してしまつて、そのため討論や講義の内容を曲折させたことが感ぜられる。知識の差というが、私は水準の差を指しているのではない。ある学問の分野が一国で根を下ろし、拡がつていくにつれて、体系もできてくるであろうし、従つて知見の深い浅いの基準もできて

くるようになってくる。又一応の常識というが、基礎的な知識の範囲もはつきりしてくるであろう。ところがこの「研究所」においてわれわれの対象としたアメリカの農場経営の新しい分析方法はわが国ではまだそうなつていない、輸入されたばかりの分野であると思う。こうした場合に全国から集つた参加者から一定の水準なり知識を見出すのは困難である。一人一人の中でも同じことがいえる。自分のことで恐縮だが、私自身、アメリカでは大学前半期で誰でも知つている統計学の知識がなく、Snedecor とか E. Z. Kelley とかの名前を挙げられても「聞いたことがある」位の惨めな状態であつた。

今夏の「研究所」における経験はこのような問題について示唆を与えてくれるものである。結論的には参加者の間の知識の深さと質を何らかの方法で狭めるのがよい。例えばアメリカの大学卒の学生が要求される事を予め学んでくるとかの方法で。揃え方をどうするか、どこまでにするかによつて「研究所」のレベル自体も決まってくるであろう。

多くの課題を抱えているわが国の農業経営学が外国の考え方、方法に期待するところも又大きい。この夏われわれのえたような機会が、今後もより多くの人に与えられ、しかもその過程を通じて新しい分野の学問が進歩発展し、わが国の風土に根を下ろすことを望んで止まない。